

## 2014年度 地理環境学コース修士論文要旨

### グローバル都市における移民のエスニック空間の多様性 —東京圏に在住するバングラデシュ人を事例として—

谷口 博香

グローバル化の進展は、「境界」を超える人の移動を活発化させ、現代社会はますますボーダーレス化している。日本においても多数の外国人が生活し、外国人移民による定住が進む中で、「多文化共生」という言葉への注目が集まり、ナショナルあるいはローカルなレベルにおいて、さまざまな施策がとられてきた。

本研究においては、バブル期の1980年代後半以降に来日した東京都周辺に居住する在日バングラデシュ人たちの生活世界にアプローチした。彼らの日常生活空間および一時的に形成される非日常的なエスニックイベントの双方に着目し、インタビューやフィールドワークを通して、移民によるトランスナショナルなネットワークや空間構築のプロセスや変遷を追った。

まず本研究において、統計データやインタビューにより明らかとなったのは、かつてカテゴリー化されたような「アジア系労働者」、「ムスリム系移民」といった枠を大きく超え、来日時期や来日目的、仕事、滞在資格などに関し、非常に多様な文脈が存在するという点である。また、彼らの日常生活に目を向けてみると、就労先の多さやチェーンマイグレーションの結果、北区を中心とする東京23区北部から埼玉県南部地域にかけての集住傾向が見られることが明らかとなった。しかし、東京都内で他国出身のニューカマーによるエスニックタウンが注目を浴びる一方で、当該地域においてはバングラデシュ人がエスニシティを大々的に示すことはなく、ナショナルな領域性を持った永続的な空間を構築していない。このことは、ナショナルな関係にもとづくネットワークの希薄さを示すと同時に、在日バングラデシュ人によるネットワークや生活圏は、仕事の有無や信仰する宗教といったよりミクロな文脈の違いにもとづき構築されていることを示唆している。すなわち、バングラデシュ人移民は置かれた環境や文脈によって多様なエスニシティを体現させ、それに応じて自己実現やアイデンティティの再確認を行うのである。

一方で、彼らによって構築される一時的なエスニック空間として、文化振興団体によるコンサートとボイシャキメラに注目した。これらのイベントは、ある程度コミュニティの閉鎖性があるとはいえ、日本との文化交流と

いう意味合いを持たせてあり、ホスト社会である日本に対しても関心が向けられている。北区や豊島区といった自治体側も、その意図に則り、長年にわたって公共空間の提供を行っており、双方向に「開かれた」空間となっている。だからこそ、ホスト社会において、受け入れ国側のマジョリティである日本人との間に、空間をめぐる対立やせめぎ合いが顕在化してこないのだといえるだろう。また、これらのイベントにおいては、彼らのエスニシティが前面に表れており、特に国旗や国歌、言語といったナショナルな側面が強調されていた。これは、バングラデシュ人たちが本国における彼らの「日常」が、ホスト社会においては「非日常」となることに加え、ホスト社会である日本の政策と権力の影響を受け、普段の生活において戦略的に、あるいは必要性のなさから自分たちのエスニシティを「隠して」いることとは対照的であり、自分たちのエスニシティや存在をアピールできる重要な意味を持つ機会となっている。こうした一時的な空間に表れるエスニシティの分析を通し、旧来のエスニック地理学がある程度の可視性や持続性を前提とした文化的景観を分析対象としてきたのに対し、新たな示唆を与えることができたのではないかと考える。

本研究では、インタビュー対象者が男性に偏っており、性別による移住理由の差や日常的な空間行動の差について研究可能性を残している。また、バングラデシュ人移民が多いとされる他国において、彼らがどのようなエスニック空間を構築しているのかについて日本との比較検討ができなかった。これらについては今後の研究課題としたい。

(指導教員：熊谷 圭知)

### 農村空間の商品化と構築される「ホーム」—岩手県一関市たっこたい民泊プロジェクトを事例に—

船渡 恵

本研究の目的は、1990年代以降の日本の農村がおかれている社会的位相を農村空間の商品化として捉え、そこでの人々の生活に光をあてながら、農家民泊をマルチ・スケールなホームの形成の場として再考することである。

1990年代以降の日本では、農村に対し、農産物の生産だけでなく、農村や農業が有する多面的機能に期待をかける機運が高まっている。とりわけ、そのような傾向の中でも、地域活性化の切り札とも称揚されるグリーン・

ツーリズムの中では、農村が都会の人々が安らげる場所、「第二のふるさと」(ホーム)として、積極的に商品化されている。

だが、農村空間の商品化の議論の中で、まだ十分に論じられていない部分がある。それは、家という家庭空間を舞台として行われる農家民泊だ。本研究は、岩手県一関市達古袋地域を事例に、農家民泊の家庭空間としての特徴が、農家民泊の実施によってどのような影響を受けるのかを考察する。

さらに、農家民泊の取組みを通して地域性が強調され、外部からのまなざしや農家民泊という契機を利用しながら、地域住民たちにとっての理想の「郷土」や「ふるさと」として地域がホームとして再構成される様子に注目する。本研究の事例からは、農村空間の商品化という社会の現象を、地域住民が戦略的に利用する様子を観察した。

本研究の事例からは、マルチ・スケールに再構成されるホームの特性を発見した。

第一に、農家民泊で舞台とされる各農村住民の家においては、家族らしさを演出する、最も小さなスケールでのホームが(再)構築される。農家民泊は、個人宅のプライベートなハウスを舞台にした、ホームの商品化ともいえる。舞台は個人宅であり、そこでの個々の主体の実践や、家族の関係性によって、外部者にとって「アットホーム」な空間が構築される。

ナショナルなスケールで農村空間の商品化現象・農家民泊を捉えるならば、それは都市・農村関係を利用した国家内での「第二のふるさと」の創出であり、ホームの構築である。すなわち、都市の人間にとっての「第二のふるさと」となるような農村性や農村らしさがホームの中で演出され、郷土や国家レベルでのホームも形成されている。ここでの都市・農村関係は、グリーン・ツーリズムや農家民泊の政策的意図で確認した通り、農家への戸別補償や農業を通じた教育など、多目的にわたる国家的な取組みなのであった。

さらに、農家民泊という地域的な取組みを通してローカルな地域性が強調され、地域住民にとってのアイデンティティの形成の場・ルーツの場所としてのホームも生み出されている。本研究の事例からは、外部からのまなざしや農家民泊という契機を利用しながら、地域住民たちにとっての理想の「郷土」や「ふるさと」として地域がホームとして再構築されようとしていた。そして、農村空間の商品化という社会の現象を、地域住民が戦略的に利用する様子を見出すことができた。

しかし、このように農村空間の商品化によってマル

チ・スケールにわたって形成されるホームだが、達古袋地域の事例をみると、ホームという空間がもともと持つプライベートな性質が、ときとして障壁となるほど際立つことがあることが確認できる。ホームはけっして私的領域として公共性と分断された場所ではない。しかし、家族が日常を営み、生命の再生産を行うホームを、政策が期待しているような、見せる・交流する場としてのホームとするには、さまざまな葛藤や困難が存在するのである。一方で、農家民泊で受け入れを行う人たちの中には、その実践に経済的採算を超えた意味を見出している人も見出された。また、こうした農村空間の商品化という行政のプロジェクトを利用するかたちで、自らが生きる地域の再発見・再構築の実践を行う主体も存在した。こうしたさまざまな方向性が、葛藤をともないながら、絡み合いつつ存在するのが、現代の日本の農村の現実であると考えられる。

(指導教員：熊谷 圭知)

## マツタケ対日貿易から見た雲南省シャングリラ県の採集者及び仲買人の生活状況

趙 怡雲

雲南省におけるマツタケの国際貿易の現状からみると、80年代以降、マツタケの輸出はずっと続いている。主要な輸出先は日本であり、日本への総輸出量は雲南省の国際貿易の中に重要な地位を占めている。雲南省内において、迪慶チベット族自治州のシャングリラ県はマツタケの主要な採集地である。この地域に暮らしている人々の中ではチベット族の割合が高く、マツタケの採集・販売は彼らの生活を支える主要財源となっている。雲南省迪慶チベット族自治州のシャングリラ県では、マツタケだけで当地の一人当たりの所得の45%以上を占め、毎年約60万人がマツタケの対日貿易でお金を稼いでいるが、日本で高い値段で売っているマツタケの10分の1にも達していない価格でマツタケ貿易をしているのが現実である。また、マツタケ採集を柱とするシャングリラ県では、昔は自然生活を暮らしていた採集者たちがマツタケの国際貿易によって現金生活に巻き込まれた。昔からある程度の自足生活を維持している彼らたちに対してマツタケの採集は現金収入をもたらす、生活は日々マツタケの国際貿易から影響を受けており、少しずつ変わってきたと考える。本論文はこうした状況を踏まえて、この地域の一大輸出拠点である日本への輸出に焦点を当てながら、中国雲南省のシャングリラ県のマツタケ対日貿易の現状を明らかにし、現地調査を行うことで対日貿易から影響を受けており、現金生活に巻き込まれて変貌してきた採集

者の今の生活の実態を把握・解明する上では、マツタケ貿易下での諸方面の変化を研究し、雲南省シャングリラ県マツタケ対日貿易からみた採集者・仲買人たちの生活像を描いてみたい。

本論文は三つの部分によって構成される。まず第一部では国際貿易の諸原理や商品連鎖の理論を踏まえて中国雲南省シャングリラ県マツタケ対日貿易の全体像を紹介する。また、シャングリラ県マツタケ貿易のシステムについて説明し、輸入出力、金額、種類、従業員数、マツタケの等級分類などについて紹介する。マツタケ輸出のルートを把握するため、中国農産物の一般像を取り上げる。さらに、国際マーケティング論の枠組みによって、雲南省シャングリラ県マツタケ対日貿易の位置づけを説明する。第二部ではマツタケ対日貿易からみた採集者たちの生活状況について説明し、現地調査の方法と結果について報告する。調査内容は三部分によって構成する。まず、シャングリラ県マツタケ採集生活の全体像を把握するため、政府や村の管理者たちを通して資料および文献を収集した。そこで、マツタケ採集村の労働力の特徴、マツタケ採集村の世帯年間収入、マツタケ採集・貿易収入の比率、マツタケ採集・貿易に関わる政府の管理活動、マツタケ成長状況を中心に調査を展開した。第二部分として、採集者及び仲買人の生活に密着し、彼らの生活状態や生活変化を把握するため、採集者及び仲買人に対して具体的な聞き取り調査を行った。最後、第三部は採集状況、交易状況、一日中の活動日程、活動範囲、心の中で覚えてきた採集地の地図などへの密着調査を通して採集者に関わる日常生活をより細かく把握し、マツタケ貿易下で採集者および仲買人の生活の真実を探求したいと考える。論文最後では、現地調査を通じて実感した事柄と、マツタケ採集生活での諸問題と解決策について考察する。

結論として、シャングリラ県対日貿易の下で、採集者・仲買人が現金生活で暮らしているものの、農耕や放牧などの自然生活の部分がまた残っている。しかし、対日貿易からのインパクトを受けて現金生活の良さを味わった採集者・仲買人に対して、意識上に自然生活への抵抗感が生じてきていることがわかった。

(指導教員：水野 勲)

## フランス、アルザス地方における「イスラーム空間」の生成—ストラスブール・大モスク建設を事例に—

佐藤 香寿実

高度経済成長期から始まった西欧諸国へのムスリムの大規模なイミグレーションは、受け入れ社会の反発を引

き起こし、「イスラームVSヨーロッパ」という構図を強化するような葛藤が生まれている。筆者が研究対象とするフランスでは、その二項対立のイメージは、政教分離原則ライシテ (laïcité) と「聖俗不可分なイスラーム」の対立というかたちをとって出現している。日本語で「非宗教性/脱宗教性」とも訳されるこの原則は、王政と結びついたカトリックを公的領域から排除することで信教の自由を保障し、フランス共和制を確立していくための歴史的な闘争とともに発展してきた。スカーフ論争に代表されるように、この共和国原則としてのライシテに挑戦するものとして、「イスラーム問題」が構築されている。

グローバリゼーションにともなって強化されるこれらの二元論には、われわれの「空間」についての想像の仕方が密接に関わっている。それは、ナショナルあるいはローカルな空間に、外部から異質な存在が侵入し、その均質性と秩序を脅かしているというイメージであり、地理学者ドリーン・マッシー (2014) が批判するような、「静的で、閉じられた、不動なものとしての、時間に対立するものとしての」空間を想像することに基づいている。この問題含みの空間認識法によって、われわれは「不可避免的に起こるグローバリゼーション」によって、われわれの住む場所の固有性が失われていると感じる。そして、グローバリゼーションに対抗して、場所の固有性を取り戻そうとする姿勢が、現実の排外的な反応を引き起こしている。ヨーロッパ諸国全体がイミグレーションによってイスラーム化することへの恐怖は、グローバル対ローカルというもう一つの二元論に基づいている。

この二元論を乗り越える新しい空間認識の可能性を提示するため、筆者はフランス北東部のアルザス地方に着目した。アルザス地方では、その独自の歴史ゆえ、ライシテの法的基盤となっている政教分離法が適用されておらず、代わりに地方法のもとで特殊な公認宗派制度が残存している。イスラームは公認宗派に入っていないが、この制度によって恩恵を受けることがある。他地域では政教分離法によって国家や地方団体から特定の宗教組織への金銭的援助は禁止されているが、ストラスブール市に2012年に建設されたストラスブール・大モスクには、建設資金として市や公共団体から助成金が拠出された。

本論文は、このストラスブール・大モスクが、動的で異種混雑的な空間として生成されている状況を、重層的なスケールの構築性と相互作用性を意識しつつ、描き出すことを目的とする。文献調査と3度にわたるフィールドワークの成果をもとに、グローバル (第1章)、フランス (第2章)、アルザス (第3章)、ストラスブール (第4章) と、それぞれの文脈で生じている現象について論

じた。しかしこれらはけっして独立の現象というわけではなく、ストラスブールのモスク建設という事例に、相互に絡み合いながら流れ込んでいる（第5章）。

本論文の成果として、まず、グローバル、フランス、アルザス、ストラスブール、というそれぞれのスケールが社会的に構築されてきたものであるということと、構築されているスケールが、われわれの生きる社会に直接的な影響を与えているということが示された。また、ストラスブール・大モスクという「イスラーム空間」が、重層的なスケールの関係的な構成から生成されているこ

とと、逆にストラスブール・大モスクの存在が各スケールを構築する一要素にもなっていることが明らかになった。地理学のスケール概念を用いて、マッシー（2014）の提唱する、相互関係的で異種混交的な、プロセスとしての空間認識に基づいて記述することで、グローバルVSローカル、イスラームVSヨーロッパ、ムスリムVSライシテという、いくつかの二元論的な思考法を問い直すことに繋がった。

（指導教員：熊谷 圭知）